

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

沙翁はやっぱり詩だと言えるまで ——『リチャード二世』雑感

狩 野 良 規*

役者で見せる、いや聴かせる芝居である。『リチャード二世』（1595-6 年）はアクションの少ない、地味で静かな作品、シェイクスピアの歴史劇を初めて見るなら、そりゃ悪王が大立ち回りをする『リチャード三世』の方が面白いに決まってる。

プランタジネット王朝最後の国王リチャード二世は、詩人肌だがいいかげんでチャランポランな性格、この王様では国は治まらない。自分の追放した従弟の貴族ヘンリー・ボリングブルック（後のヘンリー四世）に逆に攻め込まれ、退位させられた史実に取材したイングランド史劇である。

僕は 30 数年前、『リチャード二世』で修士論文を書いた。なんで修論の題材にこの俗受けしない芝居を選んだのだろう？ けれんみたっぷりの『リチャード三世』より詩作品としては上、ということを確認めたかったのか。戯曲を一所懸命読んだ跡はある。当時は、テキストレジーに興味があった。先の見えない下積みの時代。『リチャード二世』は史劇か悲劇かなんて、グチャグチャと自問自答している。いや、そもそも史劇とは何ぞや？¹⁾ 作品のテーマは？ つまる

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) 一般にシェイクスピアの戯曲は「喜劇」、「史劇」、「悲劇」の 3 つに分類されるが、それは彼が死んで 7 年後の 1623 年に出版されたシェイクスピアの最初の全集「第一フォリオ版 (First Folio)」のジャンル分けが慣例化したものである。その全集で史劇に分類されている作品は、すべて中世から近世初期にかけてのイングランド史を扱い、題名に国王の名前が冠されている。よって、『ジュリアス・シーザー』、『アントニーとクレオパトラ』などのローマ史劇や、古代ブリテン王の物語『リア王』、11

ところ、この芝居の魅力はどこにあるのか？ それに「論文の書き方がわからない〜っ」というレベルのまま、時は空しく過ぎていった。

で、修士論文は——あれでよく通してくれたと、今でも地べたに頭をこすりつけた気持ちでいっぱいである²⁾。

『リチャード二世』はそれまで沙翁が書いていた年代記風の歴史劇ではなく、国王の晩年、彼が玉座から引きずり下ろされ、はては獄中で殺されるまでの2年間に焦点を絞っている。芝居は、1398年にボリングブルックが有力貴族のトマス・モーブレーを告発する場面から始まる。これはシェイクスピアが使ったであろう種本のひとつ、エドワード・ホールの年代記³⁾の書き出しと一致する。

おっと、僕は修士課程をからくも修了した後、都立大に学士入学し⁴⁾、西洋史を勉強させてもらった。シェイクスピア学者の手になる中世イングランド史の解説に飽き足らず、一度歴史学の先生方が何を考え、どういう風に史実ないしは史料と向き合っているのかを覗いてみたかったからである。

入学から3年後、ホールの年代記を分析して、卒論を書いた。大きな収穫のひとつは、歴史をいきなりプランタジネット王朝の落日のエピソードから記述する、それがいかに普遍史を志向した中世の年代記類の姿勢と異なるかを発見したことであった。それまで歴史といえば、天地創造から筆を起こし、イングランド史よりはキリスト教世界全体を叙述するのが通例だった。だが、ホールの発想はまったく違う。彼のライトモチーフは敬愛するヘンリー八世の治世の

世紀のスコットランドに取材した『マクベス』などは、史劇ではなく悲劇に分類されている。

- 2) それから10数年後、40歳で出版した僕の最初の単著『シェイクスピア・オン・スクリーン』（三修社、1996年）を読んだ妻が、「あなた、修士論文と同じことを書いている」と。よせやい、成長していない、っつか？ いや、まあ、若いころに自分の問題設定はすでになされていた、と思いたいところだが。
- 3) 『ランカスター・ヨーク両名家の統合（*The Union of the Two Noble and Illustre Families of Lancaster and York*）』（1548年）。現在入手可能な版としては、サー・H・エリス（Sir H. Ellis）編集の1809年版をAMS Pressが復刻した版（1965年）がある。
- 4) 大学院で本格的に中世イングランド史をやるならば、当然ラテン語とフランス語、さらに中世英語ができなければならない。それほどの意欲はなかったので、学部に入り、3年間好きなように遊ばせてもらった。僕がシェイクスピア歴史劇研究の礎を築いた、実に有意義な“モラトリアム”期間であった。感謝！

同時代史を書くことであり、ヘンリー四世による王位篡奪に始まる15世紀の混乱と無秩序は、そのための長い序章であった。

指導教官⁵⁾曰く、「きわめて異例、実にポリティカル」。

シェイクスピアはおそらく、ラファエル・ホリンシェッドの年代記⁶⁾を手元に置いて『リチャード二世』を執筆したのだろうが、しかし版権のない時代、どの年代記も先行する他の作品からの引き写しは頻繁だった。よって、沙翁がホリンシェッドを参照したのか、それに先行するホールに頼ったのかは微妙。けれども、シェイクスピアが15世紀を描いた歴史劇8篇の底流をなす15世紀像、すなわち1399年のヘンリー四世の登極から1485年のバラ戦争の終結までの時期を歴史の1パターンと考える歴史像は、ホールの『年代記』にその源があると結論づけてよさそうである⁷⁾。

とくにシェイクスピアがイングランド史劇に手を染めた1590年代は、処女王エリザベス一世の後継者問題が階級の上下を問わず、人々の大きな関心の的となっていた。正当な王権の継承はいかにあるべきか。もっと端的に言えば、次の国王は誰になるのか。

また、エリザベスの宮廷は、自らの寵愛する臣下だけを傍らにはべらせるリチャード二世の王宮に似ていたらしい。街で評判の高かった沙翁の歴史劇に、

5) 清水廣一郎先生。中世イタリア史、とくにフィレンツェとビサの都市史の分野では国際的な研究者だった。ルネサンス期のヨーロッパの御用年代記についてもよくご存じで、僕が取り上げたホールの年代記のこともたいへん面白がってくれた。53歳で急逝。僕にはもったいない先生だった。

6) 大著『イングランド、スコットランド、およびアイルランド歴史年代記 (*The Chronicles of England, Scotland and Ireland*)』(1577年)。ただし、シェイクスピアが用いたのは1587年刊行の第二版だったらしい。

7) 都立大の卒論を書き直した「テューダー朝におけるバラ戦争観——エドワード・ホールの『年代記』を中心として——」(『論集』第27号、青山学院大学一般教育部会、1986年所収)、さらにそれを22年後にまとめ直した「王権を支えた歴史解釈——テューダー朝の正統史観とシェイクスピア史劇」(『王と表象——文学と歴史・日本と西洋——』山川出版社、2008年所収)を参照されたい。また、ホールの歴史観を検討する際には、E.M.W. ティリヤードが口火を切った「テューダー朝神話」論争に触れないわけにはいかない。摂理史観とバラ戦争解釈との関連を問題にしたこの議論については、「テューダー朝神話」再考」(『青山国際政経論集』第7号、青山学院大学国際政治経済学会、1987年所収)で論じている。ご一読のほど。

晩年のエリザベスが「私はリチャード二世よ」と語ったという記録が残っている。

絶対王政期に国王の廃位と暗殺を扱った芝居がいかなるインパクトをもったか、それは議会制民主主義の時代に生きる我々の想像をはるかに越えている。しかし、現代のイギリスにおいてもこの動きの少ない、寒々しい歴史劇は堂々たる人気を博している。いくら王室好きな、王室ものの芝居がしばしば大ヒットする英国とはいっても、大昔の王位篡奪劇がこれほどイギリスの観客を引きつける理由は、その政治性だけでは説明できない。

となると、やはり詩の魅力なのだろう。『リチャード二世』は、ほんとうに詩を語れる俳優の舞台に出会わないと、その真価はわからない。まさに役者の力量が問われる芝居なのである。

2幕1場。国王の叔父ジョン・オブ・ゴントが臨終に際して語る詩行は、最も美しいイングランド賛歌のひとつとして名高い。わが祖国は「王権によって統べられた島だ」、第二のエデンだ、天国にも比せられる、この幸福な種族、白銀の海にちりばめられた貴重な宝石、この祝福された土地、このイングランド……

エリザベス朝の当時、戯曲は文学と認められていなかった。文学に値するのは、詩のみ。沙翁はペストの流行で劇場が閉鎖されていた時期に長篇の物語詩『ヴィーナスとアドニス』、『ルークリス凌辱』を相次いで出版し、さらに叙情的な十四行詩^{ソネット}をせっせと書いて、貴族たちに回覧していたらしい。

やがて劇場が再開され、シェイクスピアがものしたのが、『ロミオとジュリエット』、『夏の夜の夢』、そして『リチャード二世』。悲劇、喜劇、史劇の違いはあれ、いずれも叙情的で美しい韻文が心地よい作品である。

また、院生のころ、『リチャード二世』の韻律を調べていて、ブランク・ヴァース⁸⁾の詩形をきれいに守っていることに感激したのを覚えている。「四大

8) ブランク・ヴァース (blank verse) は、1行が10音節の弱強五歩格 (iambic pentameter)、ただし脚韻を踏まないもので、“ブランクな韻文”と呼ばれる。押韻しないことから、ことばと内容に柔軟性が得られた。エリザベス朝時代のほとんどの戯曲はこの詩形で書かれている。

悲劇」の時期になると、韻文を崩し、その崩し方がまた絶妙とも思えるのだが、沙翁若きころの叙情史劇の端正さも捨てがたい魅力がある。

BBC 版の『リチャード二世』（1978 年、NHK 放映 1981 年）では、かつてリチャード二世役で鳴らした名優ジョン・ギールグッドが、今度は老貴族ジョン・オブ・ゴントに扮して、この愛国詩を歌うような調子で朗じていた。

だが、ゴントの「白鳥の歌」はほどなく、イングランドが「今は恥辱にまみれてしまった」、「恥ずべきかな、自らを征服してしまった」と嘆き節に変わる。その痛烈な一節に、内憂を抱えたエリザベス政権に対する批判が隠されていると教えてくれたのは、ソ連のシェイクスピア研究者 A. A. アーニクスト⁹⁾であった。絶対王政時代に検閲をかいくぐりながら諷刺の矢を放つシェイクスピアのアクチュアリティを語ってお見事。ソ連の学者が西側の人々とは異なる行間の深読みに長けているのは、検閲が自分たちの痛切な現実問題だからである。

おゝ、『リチャード二世』はやっぱり政治劇だ！

リチャード二世がアイルランドに遠征している間に、ゴントの息子ヘンリー・ボリングブルックが追放の禁を破って帰国し、挙兵する。3 幕 2 場、リチャードがウェールズの海岸に戻ってきて語る「空ろな王冠 (the hollow crown)」に関する切々たる名ゼリフ。「墓と蛆虫^{うじむし}と墓碑銘の話をしよう」、「みんな、この大地に座って、王たちの死の悲しい物語をしよう」。

BBC 版でタイトル・ロールを演じたのは、当時旬を迎えていたデレク・ジャコビ。うまい！シェイクスピアの 37 作品すべてを足かけ 8 年 (1978～85 年) にわたって放映したそのテレビ・シリーズ¹⁰⁾、だが低予算で、しかも教科書的な演出、必ずしも好評な番組ではなかった。しかし、同シリーズをどんなに批判する人でも、『リチャード二世』だけは絶賛する。

9) アレクサンドル・アブラモヴィチ・アーニクスト (1910-88 年) の筆になる沙翁の伝記『シェイクスピア』(中本信幸訳、明治図書出版、1972 年) は、僕の長年の愛読書。

10) 「BBC シェイクスピア覚書 (1)～(3)」(『青山国際政経論集』第 22 号 (1991 年)・第 23 号 (1992 年)・第 29 号 (1994 年)、青山学院大学国際政治経済学会 所収) 参照。この書きものが僕の映像化作品分析のスタートとなった。

僕は大学院に入学したころ、すでにこの番組を見ていたはず。でも、修士論文では「詩がいちばんの魅力」とは断言できなかった。いや、修論は長く書かなければいけない。「ジャコビの詩的なセリフまわしが絶品」とだけでは論文にならないではないか。

ちなみに、僕は原文至上主義者ではない。よく英文学の先生方の中には、文学は原文で読まなければ話にならないと言う人がいるが、それならばご本人はゲーテやドストエフスキー、チャーホフやギリシャ悲劇を原語で読んでおられるのだろうか。僕はもっと翻訳を積極的に活用してしかるべきだと考えている。ただどうだろう。小説はある程度翻訳で楽しめても、詩はやはり原文で読みたいではないか。僕は語学などさして好きでも得意でもないが、シェイクスピアを英語で読めるようになったことだけは無上の幸福だと思っている。

テレビ版の『リチャード二世』を聴いていると、シェイクスピア劇が散文で書かれた近代劇と根本的に異なることを実感させられる。散文は理性に訴えるが、韻文には独特のリズムがあり、体全体に訴えかけてくる。

4幕1場、リチャードがボリングブルックに譲位するくだりは、この史劇のクライマックスである。二人の王冠をめぐるやりとり、井戸と釣瓶^{つるべ}の比喻、自身の罪状が綴られた文書を読みあげよと強要されるリチャードの哀れ、そして自分の顔を鏡に映す無力な彼の表情。

このクーデター、実際には失政の続くリチャード二世に業を煮やした議会が動いたようで、『ケンブリッジ中世史』¹¹⁾には「革命 (revolution)」とあつたのが印象に残っている。なるほど、イギリスで封建時代から近世の絶対王政期にかけて国王の暴政と戦ったのは議会。アメリカは戦争を行なう際にも「世界にデモクラシーを広めるため」と^{のたま}宣う、あれはもはやイデオロギーにほかならないが、英国で民主主義といえ、それは歴史的な戦いによって勝ち取った議会制民主主義を指す。

だが、沙翁芝居に議会の発想は乏しい。ここのシーンも玉座から追われるリ

11) C. W. Previté & Z. N. Brooke (ed.), *The Cambridge Medieval History*, Vol. VIII, Cambridge Univ. Press, 1936, p. 362.

チャードと新王ヘンリー四世となるボリングブルックとの直接対決。

『バラ戦争七部作』をひっさげて東京グローブ座のこけら落としを飾ったイングリッシュ・シェイクスピア・カンパニー (ESC)¹²⁾ の公演 (1988 年) では、『リチャード二世』のこの場面、人物たちの衣裳も舞台美術も黒が基調でさながら葬式のように、後方には白地に赤十字の大きなイングランドの旗。リチャードに扮するのは、ジャコビより 5 歳年下のマイケル・ペニンントンである。が、朝 10 時から夜の 11 時近くまでかけて一気に上演された、『ヘンリー六世』から『リチャード三世』になだれ込む連作は、僕にとって興奮しながら見た忘れえぬ舞台だが、他日に見た『リチャード二世』の方は——気持ちよく寝てしまった。大学院を修了して数年後、本音ではまだまだ地味な詩劇よりも波瀾万丈のスペクタクル劇の方が好きだったようである。

けれども、後年 ESC の舞台ビデオを見たら、怒濤の第 1 四部作より名優ペニンントンの詩的な語りを中心のシンプルな『リチャード二世』にすっかり魅せられてしまった。我、沙翁の詩劇に開眼せり?!¹³⁾

ジャコビもペニンントンも決してハンサムな俳優ではない。映画だと脇役がほとんどだ。しかし、セリフが勝負のシェイクスピアの舞台ではたしかに超一流。『リチャード二世』も理はボリングブルックにある。リチャードは、幕が開くなり気まぐれで横暴な君主を印象づけ、だが後半になると観客のその第一印象は大きく揺さぶられ、いつしかダメ国王に感情移入させられる。ラストで獄死す

12) イングリッシュ・シェイクスピア・カンパニー (English Shakespeare Company, ESC) は、演出家のマイケル・ボグダノフと俳優のマイケル・ペニンントンが 1986 年に立ち上げた野心的なツアー・カンパニー。本拠地の劇場をもたず、イギリス国内のみならず世界各地で本格的なシェイクスピア劇を上演した。イングランド史劇は「第 1 四部作」のうち、『ヘンリー六世』三部作を刈り込んで二部作とし、『リチャード三世』につなげて三部作にまとめた。それに「第 2 四部作」の『リチャード二世』、『ヘンリー四世』第 1 部・第 2 部、『ヘンリー五世』を加えて、計 7 篇からなる『バラ戦争七部作』(初演 1986~87 年)を劇団最初の出し物とし、東京グローブ座のオープニング公演でも大好評を博した。同七部作には、ウェールズのスウォンジー大劇場で収録した舞台中継ビデオがある。

13) ESC の連作史劇に関しては、(注 2)にも記した拙著『シェイクスピア・オン・スクリーン』三修社、1996 年、第 6 章第 5 節「連作としての英国史劇——ESC の『バラ戦争七部作』」をご参照あれ。

るころには、「リチャードの死の悲しい物語」を鑑賞したな、と。

はてさて、沙翁の本格的な舞台を面白がれるようになるまでには、ずいぶん時間と手間暇がかかった。20代の後半、ろくな論文は書けなかったが、それでもきちんと詩を分析し、先行研究を（今よりずっと）丹念に読み、ノートも山積みになるほど残している。そんな若いころの自分を、今、素直に誉めてやりたいと思う——よく腐らずにシェイクスピアと付き合った。おまえは偉い。

（2015年7月 脱稿）